

大正七、八年
大正八、九年

流行性感胃流行誌

神奈川縣警察部衛生課

目次

第一章 沿革……………一

第二章 外國ニ於ケル流行史……………二

第三章 本邦ニ於ケル既往ノ流行……………五

第四章 神奈川縣ニ於ケル既往ノ流行……………一五

第五章 一九一八年ニ於ケル海外諸國ノ流行狀態……………二二

第六章 本邦ニ於ケル今回ノ流行……………三七

第七章 神奈川縣ニ於ケル今回ノ流行……………四六

第八章 流行性感胃ニ關スル統計的ニ三ノ觀察……………六四

第九章 豫防施設ノ概要……………七九

一、大正七年ニ於ケル對策……………八〇

 病原研索時代：消極的豫防時代……………

二、大正八年ニ於ケル對策……………八二

 「ワクチン」試用時代……………

三、大正八九年ニ於ケル對策……………八三

正誤表

頁	三二	九四	一〇〇	一〇三	一〇九
行	一六八	一三七	一三五	一七五	一八九
誤	翻	略	潤	快	駕
正	シ	シ	シ	シ	シ
誤	シ	略	潤	快	頭
正	シ	シ	シ	シ	シ

「ワクチン」應用時代

第十章 病原問題……………九四

第十一章 バイフェル氏菌感作「ワクチン」ノ應用ト其ノ成績……………一〇四

一、バイフェル氏菌感作「ワクチン」ノ製法……………一〇五

二、恢復患者血清凝集反應試驗……………一〇六

三、バ氏菌「ワクチン」ノ動物試驗……………一〇七

四、人體應用試驗及其ノ反應……………一一五

五、豫防注射ノ成績……………一二〇

第十二章 バ氏菌感作「ワクチン」ノ治療成績……………一三二

第十三章 總括……………一四四

附 録

流行性感胃ニ對スル豫防注射並ニ治療上ノ實驗
防疫官 北野豊治 郎 述……………一四七

大正七八年
大正八九年

流行性感胃流行誌

神奈川縣衛生課

第一章 沿革

流行性ニ現ハル「インフルエンザ」様疾患ニ關スル記載ハ、中世紀以來甚ダ多キモ Gripe「グリップ」ナル名稱ヲ與ヘタルハ西曆一七四三年ノ流行ニ屬ス。然シテ Influenza ナル語ハ一七六二年ニ同様ナル疾患ノ流行ニ際シテ名付ケタルモノニシテ「グリップ」ト同意義ニ用キラレタリ。其後一八八九年ヨリ數年ニ亘ル世界的「パンデミー」ニ於テ、バイフェル氏ガ一八九二年本病々原トシテ、一種ノ小桿菌ヲ發見シ諸多ノ學者ノ研究ニヨリ、該菌ヲ以テ「インフルエンザ」ノ病原トシテ承認スルニ至レリ。然ルニ其後地方的限局的ニ流行ヲ來シテ「グリップ」ト呼稱セララル。「インフルエンザ」様疾患ニ於テハ、細菌學上バイフェル氏菌ヲ檢出スルコト殆ンド殆ナク、恰モバ氏菌ハ消滅セルモノ、如クニシテバイフェル氏菌ノ病原性ニ對スル疑問ヲ抱カシムルニ至レリ。

茲ニ於テ「インフルエンザ」ハバイフェル氏菌ニヨリテ起リ短時日間ニ急劇ナル世界的流行性ヲ發揮スル一種特有ノ疾患ニシテ「エンデミック」ユ、エビデミック「ユ」ニ流行スル所謂「グリップ」トハ特ニ區別セラルベキモノトナスノ見解ニ到達セリ。換言セバ「パンデミック」ニシテ「インフルエンザ」ト「エンデミック」ニシテ「エビデミック」ニシテ「グリップ」トハ其ノ病原ヲ異ニスルモノトナセリ。

我が國ニ於テハ今ヲ去ル千餘年ノ昔貞觀年間以來咳嗽ヲ發スル疾病ノ流行ヲ記載スルモノアリテ、咳病、咳逆、咳逆疾又ハ「シはぶきやみ」ト稱シ、徳川時代ニハ風疾、風邪、はやり風ノ語ヲ見ルニ至レリ。明治二十三年春期ノ世界的「バンデミー」ニ初メテ流行性感冒ノ名稱ヲ用ヒタリト聞ケリ。往時病理觀念ノ進歩セザル時代ニ在リテハ、疾病ノ主徴候ヲ以テ疾病分類ノ標準トナシタルヨリ、咳嗽ヲ主症狀トナス疾患ノ流行性ニ多數人ヲ胃スモノハ、洋ノ東西ヲ問ハズ同一名稱ノ下ニ呼稱セラレタルガ如シ。サレバ「インフルエンザ」ノ流行ノ如キモ、百日咳ノ流行ト相混同シテ古文書ニ記載セラレタルモノアルハ、爭フベカラザル所ナリトス。例ヘバ弘治二年(西曆一五五六)京師小兒憂咳逆而死亡甚多(雍州府誌、日本疾病史)ノ記事ノ如キハ感冒流行ノ年次トナスモ、小兒科學叢書ニハ之ヲ以テ本邦ニ於ケル百日咳流行ノ嚆矢ナリト記セルガ如ク、又海外ニ於ケル流行ニ見ルモ彼ノ一五七八年巴里ノ流行及ビ一七三二年—一七三三年ノ流行ノ如キ百日咳ノ疫學史上ニハ同症ノ「バンデミー」ノ年次トナスアリ、其他濠洲ニテハ一八三〇年「インフルエンザ」バンデミー」ノ年次以後百日咳ノ蔓延ヲ見タリト記スルガ如キ「インフルエンザ」ノ流行ニハ常ニ百日咳ヲ伴フモノナリヤ、將又同時ニ之ガ多少ノ流行ヲ見ルモノナリヤ疑問ナキ能ハズ。是等ハ病理觀念ノ不確實ナル昔時ノ記録ニ基ク誤リナルヲ以テ「グリップペ」又ハ「インフルエンザ」ノ流行ト見做シテ流行史ヲ記述セントス。

第二章 外國ニ於ケル流行史

諸種疾病ノ原因トシテノ感冒ニ關シテハ遠ク耶蘇紀元前ノ記録ニ散見スレ共、太古ニ於ケル

所謂「インフルエンザ」ノ流行ニ就テハ記載ナキヲ以テ是ヲ知ルニ由ナシ。現今見ルガ如キ「インフルエンザ」様症狀ヲ伴ヒシ疾病ノ最モ古キ流行ハ十二世紀年代ニアルモノ、如ク爾來屢々猛威ヲ逞ウシテ歴史家及醫家ノ記述ニ上レリ。殊ニ一五八〇年ニ至リザリウス、ジーヘリウス二氏ノ記載ヲ經テ大ニ其ノ傳播流行ノ跡ヲ明カニスルヲ得、佛人ザラント氏ハ一五一〇年ヨリ一七八〇年ニ至ル流行記事ヲ詳述シ、ヒルシユ氏ハ其ノ歴史地理の病理學ニ於テ更ニ細叙シタル以來、大ニ流行區域ヲ明ニスルヲ得タリ。試ニ其ノ著明ナルモノヲ舉ゲンニ、一五一〇年ニ於テハ伊太利全土ニ流行シ、一五五七年ニ於テハ土耳其古コンスタンチノールブルニ發シテ歐羅巴全洲ヲ席捲シ、當時ハ就中小兒及老人ヲ侵スコト甚シカリシト云フ。又一五七八年ニ於テハ巴里ニ行ハレ、當時ノ症狀ハ咳嗽ノ發作反覆常ナク往々肺ノ出血ヲ來セシモノアリ。時人は「Quinte」ト呼ベリ。蓋シ「Quinte」ハ咳嗽ノ發作頻發シテ止マラザルノ意ナリ。

一五八〇年ノ流行ハ既往ニ於ケル「バンデミー」ノ擴大ナルモノニシテ歐羅巴ノ大部分ヲ侵シテ遂ニ亞非利加、亞細亞ニ傳播セリ。降ツテ十七世紀ニ及ンデ一六七五年十一月波蘭及北獨逸ニ行ハレ、延イテ和蘭獨逸、瑞西ニ傳播シ十二月ニ入りテ英國ニ侵入セリ。翌年一六七六年巴里ニ入り遂ニ佛國ヲ掠メ伊太利ヨリ西班牙ニ波及シ、遠クアフリカ、アメリカニ飛ビ就中ジャマイカ、プエルト、メキシコノ如キハ激甚ヲ極メタリ。十八世紀ニ入りテ一七二九年ヨリ一七三三年ノ數年間世界的流行ヲナセリ。即チ歐羅巴ノ東方露西亞ヨリ起リテ西漸シ瑞典、獨逸、埃太利、匈牙利、英吉利、佛蘭西、伊太利、愛蘭ニ及ビ遂ニ米國ニ波及セリ。我が日本ノ如キモ一七三〇年(享保十五年)風邪ノ流行ヲ見タル事實アリ。其ノ後一七四三年中央歐羅巴ニ流行シ其ノ病勢殊ニ猖獗ニシテ當

時初メテ此ノ症ニ Gripe ノ名ヲ付セリト。

一七六二年ニ於テハ歐羅巴及印度ニ頗ル猖獗ヲ極メタリ。抑々インフルエンザナル名稱ハ此ノ時ニ初メテ該症ニ冠セラレタルモノトス。越テ一七八〇年ヨリ一七八三年ニ亘リテノ流行ハ、區域ノ擴大ナル病勢ノ猛烈ナル殆ドン全世界ニ蔓延シ航海員ニシテ之ニ胃サレザリシモノ稀ナリト謂ヘリ。就中露西亞ベラルグノ如キハ暫時ニシテ四萬人ノ多キヲ冒セリト記セリ。次デ一七八八年、一七九九年ノ流行ヲ經テ十九世紀ニ入り一八〇〇乃至一八〇三年ニ亘リテ流行ヲ見タリ。殊ニ一八三〇年ヨリ一八三三年ニ於ケル流行ノ如キハ全世界ヲ席捲シ後述スルガ如ク我が日本ノ如キモコレガ慘害ヲ被リタル所ニシテ、近世ニ於ケル一大流行ノ記録ヲ作りタルモノトシテ特筆ニ値スルモノトス。

當時ノ流行ハ一、二月ノ間ニ既ニ全露西亞ニ蔓延シ三月ニハ、ポーランド、ボヘミアノ兩國、北獨逸、デンマルク、エデフト、シリヤ等ニ波及シ四月ニハ埃太利、佛蘭西、英吉利、愛蘭等ノ諸國ニ流行ノ徵ヲ現ハシテコロル、ダルマチャ、伊太利等ハ五月ニ其ノ來襲ニ委シ去ルノ狀況ナリ。又他ノ進路ヲ取リタルモノハ支那ニ始マリシモノ、如クマニラ、ボルネオ、ジャワ、スマトラ、印度ニ其ノ暴威ヲ逞セリ。翌年後流行トシテ亦前記ノ經路ヲ取リテ蔓延セリ。其ノ後一八五八年前後ノ大流行ヲ經テ彼ノ疫學史上ニ有名ナル一八八九年ノ世界的「パンデミー」ニ到達セルモノニシテ爾來數年間後流行ヲ逞シ、當時勃興セル細菌學ノ研究旺盛ノ期ニ會セルヲ以テ、學者之ガ病原ノ探究ニ努力セシモ遂ニ檢出スルコト能ハズシテ學說ノ喧々囂々裡ニ空シク初年ノ流行ヲ送リス。而シテ一八九二年バイフェルハベックト共ニ其ノ「後流行」ト見ルベキモノニ於テ固有ノ小桿菌ヲ發見

シ之ヲ以ツテ「インフルエンザ」ノ病原トナシ諸學者亦是ヲ承認セル事前述セルガ如シ。

今當時ノ流行蔓延ノ概況ヲ述ベンニ、最初シベリヤ地方トムスクニ於テ初メテ該病ノ流行ヲ報ゼラレタルガ如シ。以來半ケ月ヲ經テ高加索地方ヨリセバストポール、モスコ一等ニ入り西漸シテウイラナ、ブスコ、リガニ波及シ十月下旬ニ至リテ首都ペテラルベルグヲ席捲シ其ノ勢迅速ニシテ貴賤貧富ノ別ナク忽チ全人口ノ約三分ノ二ヲ冒シ病院ハ爲メニ患者收容ノ處置ニ困ジ、兵營、學校ノ如キハ其ノ慘害名狀スベカラザルモノアリト謂ヘリ。

十一月下旬ニハ更ニ西漸シテ獨逸柏林ヲ襲ヒ十二月ニ及ンデ全獨逸ヲ風靡シ次デ埃太利ニ入りバルカン半島ヲ席捲スルニ至レリ。一方佛蘭西ニ向ヘルモノハ病勢一層猛烈ニシテ劇場ノ中止トナリ巴里ノ繁榮モ之ガ爲メニ振ハズト記セリ。斯クノ如クシテ伊太利ニ入りスカンヂナビヤ半島、英吉利等ニモ迅速ニ波及シ遂ニ全歐洲ヲ風靡スルニ至レリ。一般ニ之レヲ Russian Influenza ト稱セリ。更ニ流行ノ餘波ハ遠ク大西洋ヲ橫斷シテ十二月中旬ニハ北米合衆國ヲ襲ヒ蔓延極メテ迅速ニシテ翌年(一八九〇)一月メキシコニ侵入シ二月(明治二十三年)ニハ我が日本ニモ侵入ヲ來シ、茲ニ所謂世界的「パンデミー」トシテ將又該病々原ノ發見トシテ疫學史上並ニ細菌學上ニ一大記録ヲ殘シテ終熄セルモノトス。爾來二十有餘年ヲ經テ今次ノ世界的流行ニ到達セリ。

第三章 本邦ニ於ケル既往ノ流行

「インフルエンザ」様疾患ノ本邦ニ存在セルヤ否ヤニ關シテハ確ナル記載ナキヲ以テ詳カナラザレ共平安朝以後ノ記録ニ前述セル如ク咳病、咳逆(しはぶきやみ)ト呼ビナセル主トシテ咳嗽ヲ

發スル疾病ノ流行セシハ明カナル事實ナリ。此ノ咳病流行ヲ以テ直チニ今日ノ「インフルエンザ」ト見做ス能ハザルハ既ニ記述セル所ナリトス然レドモ其ノ症狀ノ上ヨリ或ハ流行傳播ノ狀態等ヨリ觀察シテ「インフルエンザ」ト推定セラル、點ナキニアラズ。日本災異志稿、日本疾病史等ヲ見ルニ同病ノ起原ニ關シテハ歐洲ニ於ケル流行記録ヨリ數世紀上古ニアルモノ、如ク、貞觀四年(西曆八六二)以來咳逆病ノ流行ト見做スベキモノ數十回ニ及ビ其ノ内ニ海外ヨリ傳播セリト稱セラル、モノ亦少カラズ。貞觀十四年(西曆八七二)ニ於ケル流行ノ如キハ時人之ヲ勃海ノ客ガ毒氣ヲ齎シテ傳播セリト謂ヒ、天福元年(西曆一二三三)ニハ夷狄ノ入京ニ原因スト傳ヘタリ。降ツテ徳川時代ニ入り享保十五年(西曆一七三〇)疫邪流行ハ異國ヨリ先ヅ長崎ニ渡リ然ル後蔓延ヲ來シ同十八年ニ至ルマデ猖獗ヲ極メ大阪三郷ノ如キハ罹患スルモノ三十三萬餘人アリト記セリ。享和二年(西曆一八〇二)ニハ和蘭陀人ヨリ傳ヘシト謂ヒ、或ハ長崎ニ漂流セシアンボンナルモノ之ヲ齎シタリトモ稱シ、或ハ蠻人ヨリ生ゼシトモ云フナド其ノ流行ノ泉源ニ就テハ區々ナレ共異國ヨリ傳播シタルハ争フベカラザルガ如シ。而シテ九州ヲ席捲シテ北上シ京都ニ入り遂ニ全國ニ蔓延セルモノ、如シ、時人之ヲ「アンボン」風或ハ薩摩風ト稱セリ。次デ天保三年(西曆一八三二)ニ於テハ西歐諸國、亞米利加大陸ニ亘リテ一大「バンデミー」ヲ出現セシ年次ニ相當シ本邦亦琉球人ノ來朝ニヨツテ之ガ侵略ヲ被リタリ。人呼ンデ「琉球風」ト云ヒ南九州ヨリ北奥羽ノ地ニ至ル廣茫六千餘里ノ地僅ニ三ヶ月ニ滿タズシテ衆人同病ニ胃サレタルヲ記シテ風邪ノ靈妙ナル力ニ驚嘆セリト云ヘバ該流行ノ猖獗激甚ナルヲ想像スルニ足ルベシ。

安政元年(西曆一八五四)ニハ「アメリカ」風ト稱シテ米艦ノ橫濱沖ニ來航ヲ見ルニ及ビテ初メテ

流行蔓延ヲ見タリト記セリ。其ノ後地方的限局的風邪ノ流行ハアリタルモ瀰蔓性ノ大流行ヲ見タル事ナクシテ明治年代ニ入り一八八九年ニ於ケル彼ノ世界的「バンデミー」ノ遂ニ翌明治二十三年(西曆一八九〇年)橫濱港ニ流行ノ徵候ヲ現ハシ暫時ニシテ本邦全土ヲ席捲シ後兩三年間激烈ナル流行ヲ反覆シタル事海外諸邦ノ流行狀態ト一致セリ。

以上ハ本邦ニ於ケル「インフルエンザ」流行ノ源泉ノ海外ニ在リト見做スベキモノナルモ其ノ他大小ノ流行幾多度存在スルアリ。是等ハ何レモ「インフルエンザ」流行ノ週期說ニ重要ナルモノアルヲ以テ海外諸國ニ於ケル流行ノ年次ト對照シテ其ノ主要ナルモノヲ表記セントス(本表ハ日本災異志稿、日本醫學史、日本疾病史ヒルシユ病理學、小兒科叢書等ヲ參照セルモノトス)

外國ノ流行年次

本邦ノ流行年次

- 貞觀四年(西曆八六二年) 一月自去冬末京城及畿内外多患咳逆死者甚衆(三代實錄)
- 貞觀五年(八六三)
- 貞觀七年(八六五)
- 貞觀十四年(八七二)
- 正月二十日辛是日京邑咳逆病發死亡者衆人間言勃海客來黑土毒氣之令然焉(三代實錄)

延喜二十年(九二〇)

延長元年(九二二)

正歷四年(九九三)

六月今月人民悉咳疫五六月間有咳逆疫日

本紀畧

寛弘七年(一〇一〇)

長和四年(一〇一五)

久安六年(一一五〇)

十月二十六日成辰近日咳病峰起貴賤上下

敢無免者老者多以夭亡民庶粗死亡

近年以來第一咳疫也(本朝世紀)

安貞二年(一二二八)

天福元年(一二三三)

二月十七日壬辰近日咳病世俗稱夷病去比

夷狄入京萬人翫見云々是極不吉徵也(明月

記)

寛元二年(一二四四)

是近日咳病温氣流布貴賤上下無免之間(吾

一三八七

歐洲

一五五六

一五五七 土耳其、伊太利、瑞西、佛蘭西、和蘭

一五八〇

亞細亞、土耳其、佛蘭西、西班牙、ホルトガル、獨

逸、和蘭、英吉利、瑞典、阿非利加ニ及ブ

一六二六―二七

北亞米利加、南米、西印度

一六四七

西班牙、北米

一六七五―七六

本邦ニ於ケル既往ノ流行

妻鏡

文永元年(一二六四)

元徳元年(一二二九)

ことしはいかなるにか「シハブキヤミ」はや

りて人多くうせ給ふ(増鏡)

正平二十年(一三六五)

應永十四年(一四〇七)

弘治二年(一五五六)

京師小兒憂咳逆而死亡者甚多(雍州府志)

慶長十九年(一六一四)

九月畿内近畿風疾流行自是月至十月、